

南アジアの「イスラーム化」の史的展開とパキスタンにおける歴史言説

須永 恵美子*

I. 本稿の目的と背景

本稿の目的は、パキスタン社会を理解するために、その歴史の変容に最も深くかかわっているイスラームに焦点を当て、パキスタンの文化および社会思想について考察することである。具体的には、パキスタンの「イスラーム化」の史的展開を検討し、ウルドゥー語で書かれた歴史言説を分析することによって、パキスタンにおけるイスラーム認識を明らかにする。

パキスタンの総人口は1億6千万人を超え、世界で2番目に大きなムスリム国家である。インド、中国、アフガニスタン、さらに西アジア、中央アジアと隣接し、国際政治的にも重要性が際立つ。また、2001年9月の同時多発テロ以降は、「テロとの戦い」でアメリカと同盟関係にあり、世界的な注目を集めている。

ムスリムが一つの「Qaum (nation/民族)」であるということは、パキスタンを建国する上で重要な根拠となった。1940年、「パキスタン建国の父」であるムハンマド・アリー・ジンナー(Muhammad 'Alī Jinnāh, 1876-1948)は、ヒンドゥー・ムスリム二民族論に基づき、南アジアのムスリムのための自治領を提唱した。この背景には、「ヒンドゥー教徒とイギリスが結託し、数の上でマイノリティであるムスリムを抑圧している」という危機感があった。

こうして出来上がったパキスタンは、4つの州に5つの民族が共存するものとなった。パンジャーブ州、スィンド州、バローチスタン州、北西辺境州があり、これに対応する形でパンジャービー、スィンディー、バローチー、パシュトゥーンという民族があり、各民族がそれぞれ独自の言語を有している。さらに、特定の土地を持っていないものの、分離独立の際にインドから移住してきたムハージル(ウルドゥー語で移住者を意味する)も一つの民族と数えられることが多い。

II. 「イスラーム化」の概念と南アジアにおける特質の検討

本節では、「イスラーム化」という概念[小杉2006]を使ってイスラームの動的なプロセスを見ることにより、イスラーム世界におけるパキスタンの変容を考察する。

1. 「イスラーム化」の概念

「イスラーム化」という動的なプロセスを整理すると、①イスラーム化／現地化・地域化、②脱イスラーム化／外在化、③再イスラーム化／現代化・グローバル化[小杉2006: 556]の三段階に定式化される。まず①イスラーム化／現地化・地域化から説明する。イスラーム化は、ある地域に、はじめてイスラームが広がるときに起きる現象である。すなわち、非イスラームであった社会に新しくイスラームが参入し、個人の信条、支配者への追従、社会的・経済的要因などさまざまな理由により個々人の宗教として受け入れられ、定着していく過程である。ムスリム人口が増え、イスラーム法の実践が広まるとともに、社会の中にイスラーム的な制度が広まる。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

「イスラーム化」という用語は、しばしば、一方的にイスラームが深化・拡大することを指すと考えられるが、実際のプロセスは決してそうではない。イスラームが広まっていくプロセスにおいて、その地域社会にイスラームという外来のものが一方的に浸透してだけでなく、逆にイスラームが現地化するというプロセスも同時並行的に展開される。それを示す具体例として、人名や言語の現地化が挙げられる。南アジアにおいても、イスラームの浸透と共に、たとえばジャミール (Jamīl)、ハサン (Ḥassan)、スルターナ (Sulṭāna) のような、アラビア語やペルシア語に起因する名前が浸透した [Schimmel 1989]。それと同時に、南アジアの地にもともとあった名前（たとえばバクシュ -bakhsh、ピービー -bībī、ジャーン -jān など）が、ムスリムの名前として用いられる現象が起こった。前者を人名のイスラーム化とするならば、後者がイスラーム名の現地化である。

また、イスラーム関連のアラビア語の単語がウルドゥー語の中に取り入れられ、ウルドゥー語として使われるようになった。それと同時に、人々がウルドゥー語やその他の現地語で、イスラームについて思考するようになるというのも、現地化の例である。

②脱イスラーム化とは、①でイスラーム化された地域社会が、非イスラーム化していく過程である。これは植民地支配やそれを継承した独立国家がイスラームを排除する場合などに生じる。この過程においては、当該社会の中に歴史的に植えつけられたイスラームを、本来外来のものであると認識する現象が見られる。これが外在化である。

③再イスラーム化は、脱イスラーム化を経た地域社会が、再びイスラーム化するプロセスである。この際、①のイスラーム化とは異なり、必ずしもその社会に合わせた現地化が生じるとは限らない。社会自体の近代化が進んでいるため、イスラーム理解が現代化することもおこるし、また、グローバル化といった現代社会の実情に沿った解釈が伴われることがある。このような現象は、19世紀以降にグローバルな「世界」が登場した後に観察されるようになった。20世紀初頭のヒラーファット運動や、20世紀後半のイスラーム経済なども、再イスラーム化／現代化の例として挙げられる。

また、イスラーム政党の登場も、グローバル化の現象として捉えることが出来る [小杉 2006: 556]。南アジアでは、1600年の東インド会社設立から始まる大英帝国支配の影響により、早くから立憲制や政党制といった政治システムが導入されていった。1941年にマウドゥデー (Sayyid Abū al-A'la Maudūdī, 1903–1979) によって設立されたジャマアテ・イスラーミー (Jamā'at-e Islāmī: JI) は、イスラーム政党の先駆である¹⁾。英国式の政治システムが浸透していたとはいえ、イスラーム勢力が政党という形でその要求を主張しようとしたことは、社会的にも思想的にも大きな衝撃を与えた²⁾。

この①から③の過程は、かならずしも時系列的にこの順番で起こるとは限らず、時代的に明確に区分できるとも限らない。南アジアのようにイスラーム化自体が多数派に至るところまで進行していない場合、イスラーム化と再イスラーム化が共時的に観察されることは不思議ではない。また、従来は、近代化の過程が脱イスラーム化をもたらすとみなされていたが、イスラーム復興の現象が各地で顕在化してからは、それが現代化を伴う再イスラーム化でありうることも知られるようになった。いずれにしても、イスラーム化／脱イスラーム化／再イスラーム化が動態的なプロセスであることに留意する必要がある。

1) パキスタンの宗教勢力と政治組織については、[加賀谷 1992; Aziz 2007] が詳しい。

2) ジャマアテ・イスラーミー設立の背景には、インド国民会議派とイギリス政府の政策が、次第にヒンドゥー教徒寄りになっていったことに対する危機感があった。ただし、当時の国民会議派には多数のムスリムも含まれており、独立まで多くのムスリムが分離独立に反対していた。建国の父であるジンナーもまた、国民会議派出身であった [加賀谷 1977]。

2. 南アジアにおけるイスラーム化の史的展開

(1) 最初のイスラーム化

次に、南アジアとパキスタンのイスラーム化のプロセスを具体的に検討する。

8世紀におけるムハンマド・イブン・カーシム(Muhammad ibn al-Qāsim, 694–715)の侵攻にとともに、南アジアにイスラームがもたらされた。これが、南アジア最初のイスラーム化である。それまで、この地ではヒンドゥー教や仏教、土着の信仰が根付いていた。南アジアのイスラーム化を促進したのは、イスラーム神秘主義思想であった。スーフィー聖者の活動や、その聖廟の崇拝が、平和裡なムスリム人口の増加に大きな役割を果たした。

12世紀になると、クトゥブッディーン・アイバク(Qutb al-Dīn Aibak, –1210)により奴隷王朝(1206–90)が成立し、北インドを中心にムスリム支配の基礎が築かれた。この王朝以後、16世紀までハルジー朝、トゥグルク朝、サイイド朝、ローディー朝などのイスラーム諸王朝が続いた。

1526年にバーブル(Bābur, 1483–1530)によってムガル朝が樹立されてから、1857年のインド大反乱によって王朝が崩壊するまで、南アジアにはペルシア宮廷文化が栄えた。当時、民衆の間ではウルドゥー語が話されていたが、宮廷および知識人の言語はペルシア語であった。ムガル朝は第3代アクバル皇帝(Jalāl al-Dīn Akbar, 1542–1605³⁾)の時代にその支配体制が確立され、現在のアフガニスタンからバングラデシュにまでいたる大帝國を築いた。

宗教に関し、ムガル朝の皇帝たちはムスリムであったが、必ずしもその宗教を民衆に強要することとはなかった。アジアの多くの地域において、ムスリムの征服活動が行われたところでは、それに続いて被征服者の大半がイスラームを受け入れていったが、ムガル朝では、ほとんどの地域においてヒンドゥー教徒が圧倒的な多数を占め続けた[近藤 2002: 284]。一方で、チシュティー教団、カーディリー教団、ナクシュバンディー教団といった神秘主義教団が、民衆を取り込む形で影響力を伸ばしていった。特に、12世紀にムーヌッディーン・チシュティー(Mu‘īnuddīn Chishtī, –1236)によって南アジアに導入されたチシュティー教団は、支配層および民衆に対して絶大な影響力を持っていた[Schimmel 1980: 86]。

第6代皇帝アウラングゼーブ(Muḥī al-Dīn Aurangzeb ‘Ālamgīr, 1618–1707)はイスラームを重視する厳格な宗教政策を打ち出し、アクバルの時代に廃止された非ムスリム住民に対するジズヤ(人頭税)を復活させた。アウラングゼーブ皇帝死後、皇位継承争いや地方の諸勢力からの圧迫などにより、ムガル帝國は解体と衰退の道をたどった⁴⁾。

(2) イギリス植民地下の脱イスラーム化とイスラーム復興

イギリス統治時代には、南アジアにおける西洋式教育が開始された。その目的はインド人大衆のための広く普遍的な基礎教育ではなく、一部の官僚を作り出すためのエリート教育であった⁵⁾。植民地政府では、ムガル朝の宮廷公用語であったペルシア語に替わり、英語が公用語とされた。

イギリスの植民地化と、ムガル朝の衰退に伴い、ムスリム知識人層の中に社会の崩壊に対する危機感が深まっていった。こうした状況の中、伝統的なイスラーム法学に飽き足らず、国家体制や社

3) アクバルは上層階級のヒンドゥーを登用し、非ムスリム住民に対して寛容な政策を行ったことで知られている。第4代皇帝ジャハーンギールや第5代皇帝シャー・ジャハーンの治世にもアクバルの融和主義の方向が引き継がれ、内政は安定した[佐藤ほか 1998]。

4) 最後の皇帝バハドゥル・シャー2世は、1857年のインド大反乱の責任をとられ、退位させられた。

5) 植民地時代の教育政策について、T.B.マコーレイは「われわれイギリス人と被支配者インド人民衆との間の通訳となる階層、つまり、血と皮膚の色はインド人であっても趣味嗜好、考え方、倫理観、知性はイギリス人であるような人々をつくる」と述べた[Misra 1961]。

会制度の理念にまで視野を広げて学問的総合を試み、改革思想を唱えたのがシャー・ワリーウッラー（Shāh Walī Allāh al-Dihlawī, 1703–62）である。ワリーウッラーはハディース学を基礎にイスラーム諸学を再構成し、ヒンドゥー教の影響を受けたムスリムの間の社会慣習の改革を訴えた。また、スーフィー教団における、宗教学的に逸脱した信仰の実践を批判した〔加賀谷 1977: 37〕。

ワリーウッラーの理念は、18 世紀後半から 19 世紀にかけてのインド亜大陸のイスラーム思想に継承され、理論から実践の段階に移行し、やがて宗教・社会改革と反英抵抗の運動に発展していった〔加賀谷 1977: 38〕。彼の息子シャー・アブドゥルアズィーズの時代になると、ムスリム権力やイスラーム法にとっての脅威は、父の頃のマラータ・ジャート勢力だけではなく、イギリスも加わった。アブドゥルアズィーズは、イギリス東インド会社による植民地支配への抵抗を、宗教的義務としてムスリムに呼びかけた⁶⁾。

1875 年のアリーガル大学設立をきっかけに、北インドのアリーガル大学でムスリムの文化教育運動であるアリーガル運動がおこった。この中心となったのが、社会改革家のサイイド・アフマド・ハーン（Sir Sayyid Aḥmad Khān, 1817–1897）である。彼はイギリス思想や近代自由主義を高く評価し、ムスリムの社会的地位向上のために、ムスリムのための近代教育機関の必要を説いた。実際に、北インドのアリーガルにイギリス式の高等教育機関を設立し、以後アリーガル運動を主導することになった。

イギリス植民地支配下では、近代化の名のもとにイギリスの制度や文化が導入されると、脱イスラーム化が進んだ。同時に、一部のムスリムの間では、近代教育における極端なイスラームの外在化や、植民地政府のヒンドゥー優遇主義に危機感を覚え、イスラーム復興という対極の潮流が生まれた。また、サイイド・アフマド・ハーンのように、親英的で近代主義者でありながらも、後にイスラーム復興を率いるという、両義的な価値観を持つ人物を生む土壌ができた。

(3) 独立運動と再イスラーム化

1905 年のベンガル分割令に対する反対運動の中で、アリーガル大学を中心として全インド・ムスリム連盟（All India Muslim League）がダッカで結成された⁷⁾。連盟員の一人であったムハンマド・イクバル（Muḥammad Iqbal, 1877–1938）は、後のパキスタンで「建国の詩人」と称される詩人であり、政治家であり、哲学者であった。彼は 1930 年の全インド・ムスリム連盟年次大会で議長を務め、議長演説で北西インド⁸⁾のムスリムのための独立した国家の必要性を説いた。

イクバルは、イスラームの③グローバル化の顕著な例として挙げられる。彼は愛国的な詩人であると同時に、西洋教育を受けており、イギリスに留学中に英語で『イスラーム宗教思想の再構築（*The Reconstruction of Religious Thought in Islam*）』を執筆している〔Iqbal 1934〕。これは、南アジアのムスリムが、イギリスの地で、英語を使いイスラームを語るといふ、まさにグローバルな現象の一つといえよう。

独立運動でイクバル以上に重要視されているのは、「パキスタン建国の父」と呼ばれるムハン

6) アブドゥルアズィーズが訴えたイギリス人の支配に対するジハードは、後に弟子のサイイド・アフマド・バレルヴィーの指導で行われた。これはムジャヒディーン運動と呼ばれた。この運動は、初期イスラームが教える信仰の前での平等・団結に基づく理想社会の実現を目指し、その障害となる異教徒支配、とくに最強の勢力として登場してきたイギリスの支配を打破することを目標とした〔加賀谷 1977: 39〕。

7) 創立当初、連盟の常任議長にはアーガー・ハーン三世（Āghā Khān III, 1877–1957）が選出された。当時の指導者たちは連合州、ベンガル、ボンベイなどの大地主や実業家で、ムスリム上層の保守的特権層がその中心を占めていた〔加賀谷 1977: 90–92〕。

8) イクバルは独立国家に含まれる地域として、パンジャーブ州、北西辺境州、スインド州、バルーチスタン州をあげている〔Verma 2001: 48〕。

マド・アリー・ジンナーである。彼の肖像画は、今日のパキスタンで政府機関や学校の教室に飾られており、彼の思想や演説文章は、あらゆる場面で引用される。また、憲法前文にもその名前が登場する。

パキスタン憲法(1973年)前文

パキスタンは社会正義であるイスラームの諸原理に基づく民主国家であれ、というパキスタン建国の父であるカーイデ・アーザム・ムハンマド・アリー・ジンナーによって作られた宣言に忠実でなければいけない[加賀谷 1991]

ジンナーはホージャ派ムスリムの皮革商の子としてカラチ(カラチ)に生まれた。1869年弁護士資格を得てロンドンから帰国後、ボンベイで弁護士として名をなし、政治活動に入った。彼自身は近代的な思考の持ち主であり、英語で考え、英語で議論し、英国紳士風のスーツを好んだ。当初はヒンドゥー教徒とムスリムの統一に基づく民族運動の路線を進み、インドの自治に関する国民会議派・ムスリム連盟協定の成立に尽力した。しかし、20年代から30年代初め、再び長くロンドンに滞在する中で、インド・ムスリムの利権擁護の方向に傾いた。34年の帰国以降は、分裂していたムスリム連盟の組織再建に着手し、国民会議派との対抗姿勢を鮮明にした[Jalal 1985: 13]。

1940年3月のムスリム連盟ラホール大会では、ジンナーがヒンドゥー・ムスリム二民族論を打ち出し、ムスリムのための分離独立国家を主張した。以後、ムスリム連盟は学生・農民を含む広範な層にまで基盤を有する大衆的政党へと強化され、イギリス統治者に対する交渉相手としての地位を獲得していった。

(4) パキスタン建国と憲法制定

1947年8月14日にパキスタンが、翌日インドが独立を宣言した。新たに引かれた国境を越えて、ムスリムはインドからパキスタンへ、ヒンドゥー教徒やシク教徒は逆方向に移住した。その数は1000万人におよぶと見積もられている。この史上最大の民族移動の際、宗派暴動などで100万人もの犠牲者が出た[Khan: 2008]。しかし、これだけの移住者と犠牲者を出しながらも、インドからムスリムがいなくなることはなかった⁹⁾。つまり、パキスタンは、南アジアのムスリムを糾合したムスリムだけの国家をつくる、という当初の目的を果たすことが出来なかったのである。

建国直後、パキスタンでの政権議会ではムスリム連盟が絶対多数を占め、国家元首である総督ジンナーと中央政府首相リヤーカト・アリー・ハーン(Muhammad Liyāqat 'Alī Khān, 1895-1951、首相在位 1947-51)の体制下で、つかの間の安定した状態にあった。しかし、48年のジンナーの死後、リヤーカトも暗殺され、連盟内部の対立が現れ始めた。

独立後のパキスタンは、建国後早々に憲法を作ることが出来なかったため、1935年のインド統治法を暫定憲法として採用せざるをえなかった。49年3月、パキスタン制憲議会で「憲法の諸原則についての決議」が通過し、ここに神の主権が明記された。56年の第一次憲法では、イスラーム国家の理念を前文に宣言した¹⁰⁾。

9) 1951年の国勢調査では、インド人口の10%、3541万人がムスリムで、パキスタン人口の14%、1068万人が非ムスリムであった。このため、インドのムスリムとパキスタンのヒンドゥーは、それぞれの国の「少数派コミュニティ」として、分離独立の責任と両国の敵対関係の重荷を背負わされることになった。両国関係が悪化すると、彼らは「敵国の手先」として警戒や憎しみの目で見られることもあった[加賀谷 1977: 175]。

10) しかし、イスラームに関しては、この後の改定でもこれ以上の言及はなかった。むしろ、実態の法と行政の観点では、近代的セクラーであるという指摘もある[加賀谷 1991: 217]。

1956 年憲法 前文

全世界の主権は、ひとり全能のアッラーにのみ属する。アッラーが定めた範囲内で、パキスタン国民を通じてパキスタン国家に行使させるべくアッラーが委託した権限は、神聖にして犯すべからざる信託である [加賀谷 1991: 212]

前文

少数民族が自由に自らの信仰を告白および実践し、ならびに、自らの文化を発展させるために、適切な規定がつくられなくてはならない

I. 1. 共和国およびその領域

(1) パキスタンは、パキスタン・イスラーム共和国なる名称の連邦共和国である

I. 2. 国教としてのイスラーム

イスラームはパキスタンの国教である

II. 20. 信仰告白および宗教施設を運営する自由

法律、公の安寧秩序、および道徳を条件として、

- (a) すべての国民は、自己の信仰を告白し、実践し、かつ布教する権利を有する
- (b) すべての宗教およびセクトは、自己の宗教団体を創設し、維持し、かつ運営する権利を有する

III. 41. 大統領

- (1) パキスタンの大統領は、国家の元首であり、共和国統合の象徴である
- (2) 大統領は、年齢 45 歳以上のムスリムであり、かつ、国民議会の議員として選挙される資格を有するものでなければならない [新井 2007]

(5) 60～70 年代の民主化・近代化とイスラーム復興

1958 年、アイユーブ・ハーン (Muhammad Ayyūb Khān, 1907–74、大統領在位 1958–69) は無血クーデタで全権を掌握した。アイユーブ政権期に成立した 22 の財閥のうちほとんどが西パキスタンを本拠地としていたため、東西パキスタンの経済格差は拡大し、国家統一の危機は悪化の一途をたどった [深町 1992: 162]。アイユーブは大統領に就任すると、政党活動を停止させ、イスラームを政治運営上の不安定の要因とみなし、これを抑制する政策を展開した。

その顕著な例が、国名の修正である。パキスタンの国名に関して、アイユーブは 62 年憲法で「イスラーム」の部分で排除させた。これは国民の不評を買い、結局「イスラーム共和国」と再改名された。

1961 年には、ムスリム家族法が制定された¹¹⁾。この法律が施行されたことにより、複数の妻を持つことも、離婚や別居をすることも推奨されることではないが、手続きに則っていれば合法と認められることになった。これは、名称はムスリム家族法であるものの、必ずしもイスラーム法の台

11) 家族法を制定する際の焦点は①夫が二人以上の妻を迎える場合、②離婚、③別居する妻からの扶養請求であった [湯浅 1997: 211]。

頭ではなく、近代化政策の一環ともとらえられる[井上・子島 2004: 39]。

アイユーブによる近代化が進められた時代に、パキスタンでもっとも影響力のあるイスラーム主義者マウドゥーディーが頭角を現した¹²⁾。彼の創設したジャマーアテ・イスラーミーはシャリーアに基づくイスラーム国家建設や、インドを筆頭とする外来の文化やその影響の排除を主張しており、個別の民族による分離主義も非合法だと断言した[Aziz 2007: 139–141]。

1965年の第2次インド・パキスタン戦争が敗北に終わり、この結果アイユーブは国民の支持を失った。さらに学生の自由選挙要求運動に端を発する広範な反政府運動によって、69年3月に大統領職を辞任し、当時の陸軍参謀長ヤヒヤー・ハーン(Āghā Muḥammad Yahyā Khān, 1917–80、大統領在位 1969–71)に全権を委譲した¹³⁾。

1970年の総選挙で第一党となったアワミ連盟は、西パキスタンに対して、東パキスタンの自治を要求した。ベンガル地方のダッカを中心とする東パキスタンは、47年に西パキスタンと同時に分離独立を果たした。しかし、物理的にも精神的にもかけ離れた両地方が、イスラームというシンボルだけで紐帯することには限界があり、独立以前から問題視されていた。西パキスタンではウルドゥー語が共通語として徐々に浸透していたのに対し、東パキスタンでは、独立以前からベンガル語で支えられた確固たるベンガル文化を保持していたことも、要因として大きい。

1971年12月、東パキスタンを支援するインドとの間で、第3次インド・パキスタン戦争に突入した。その結果、パキスタン軍は無条件降伏し、東パキスタンはバングラデシュとして独立した。ヤヒヤーは敗戦責任をとって大統領を辞任した。これを受けて新大統領になったのはパキスタン人民党の党首ズルフィカール・アリー・ブットー(Zūlfiqār ‘Alī Bhūṭṭo, 1928–79、大統領在位 1971–73、首相在位 1973–77)である。ブットーは民間企業国有化など、社会主義と民主化を強調した¹⁴⁾。

(6) 80年代、ズィヤー政権のイスラーム化

パキスタン建国以来、もっとも明確にイスラーム化の動きが見られたのはズィヤー(Zīyā-ul Ḥaq, 1924–88、大統領在位 1978–88)政権下である。彼は1977年にクーデタを経て大統領に就任すると、即座にイスラーム化政策を打ち出し、憲法を修正した。この1985年憲法修正では、大統領の権限が拡大されると同時に、イスラーム条項も強化された。司法ではイスラーム法を導入し、公務員に職場での礼拝を強要させた。経済面では、ザカート(喜捨)を義務化し、イスラームの福祉制度の充実を図った[Clark 1987]。ズィヤー政権のイスラーム化政策では、大学の教科書に「パキスタンの基盤は人種や、言語や、地理的な要素によるものではなく、共通した宗教的体験によるものである」と明記させた[深町 1992]。

1979年、フドゥード法(イスラーム法上のハッド刑を明文化したもの)¹⁵⁾が制定された。また同時期に、最高裁判所と高等裁判所にシャリーア法廷も設置され、この措置は現在まで続いている。

12) 彼はイスラーム復興の思想的指針を打ち出し、その著作は各国語に翻訳され国外でも広く読まれている[山根 2003]。

13) ヤヒヤーの業績として、1970年10月の総選挙が挙げられる。これはパキスタン建国後、23年目にして初めて行われた総選挙となった。さらにその後20年間に5回行われた総選挙のうち、初めの一回が「最も公正な選挙であった」ことは数多くのパキスタン人が認めている[深町 1992: 174]。東パキスタンではアワミ連盟(Awami League)が国会議席の過半数を制して圧倒的に第一党となり、西パキスタンではパキスタン人民党(Pakistan People's Party: PPP)が勝利を収めた。

14) 1973年に発効した新憲法では議院内閣制をうたい、首相の権限を強化したうえでZ.A.ブットー自身が首相となった。ブットー文民政権は軍の文民統制を試みたが、一般に民政という言葉が与えるソフトなイメージとは異なり、きわめて強権的であった[山中 1992]。

15) この法は、ズィヤー政権のイスラーム化政策の一環として制定され、2002年にパンジャープで起きたモハッタラム・マイ集団レイプ事件をきっかけにマスコミに取り上げられるようになった[Mai 2006]。

(7) 90年代以降——脱イスラーム化か、再イスラーム化か

1988年8月、ズィヤー大統領は大統領機の墜落で死去した。彼の死後、1999年にムシャラフが軍事クーデタを起こすまで、政権は短期間にめまぐるしく交代した¹⁶⁾。この間、不安定な政治と社会情勢により、人々の関心は宗教よりも経済に注がれた。また、イスラームは政権の正当化や、一部のイスラーム勢力を懐柔するための大義名分として使われてきた。

1990年10月の総選挙では、財界出身のナワーズ・シャリーフ (Miyān Nawāz Sharīf, 1949–、首相在位 1990–93, 97–99) 政権が誕生した。彼は経済自由化を促進させた。93年10月に総選挙が開かれ、再びパキスタン人民党主導のB.ブットー政権が成立した。11月には同じくパキスタン人民党のラガーリー (Fārūq Aḥmad Khān Laghārī, 1940–、大統領在位 1993–97) が大統領に選出された。部族地域のイスラーム法施行を要求する反乱、身内びいき、カラーチーの治安の悪化、財政危機などの中で、ラガーリー大統領は96年11月に内閣を解任した。

翌年の97年2月の総選挙で、再び第二次ナワーズ・シャリーフ内閣が発足したが、この政権も混迷が続いた。その打開策として、クルアーンとシャリーアを国家の最高法とする憲法修正案が提出された。これはパキスタンのイスラーム化が進行するという観測を生んだが、結果的に上院を通過せず、大義名分としてのイスラームを掲げることで、高まりつつある批判をかわそうとしたものと考えられる [井上 2003: 9]。

90年代以降は、脱イスラーム化と再イスラーム化の両方の要素が複雑に入り交じっており、評価は容易ではない。個別の事象の分析は別途必要であるが、総じて、両方のベクトルが競合しながらも、再イスラーム化が次第に強まったとすることができる。

III. ウルドゥー語によるイスラーム歴史言説

1. ウルドゥー語とイスラーム

パキスタンが建国された時、民族はムスリム、言語はウルドゥー語¹⁷⁾、宗教はイスラームが選ばれた。現在、パキスタン国内では、ウルドゥー語が憲法で規定された公用語とされており、約1千万人の母語話者人口を擁している。学校教育やメディアの普及により、第二・三言語としての話者まで含めると、1億7千万のパキスタン人の大多数が、この言語を理解している。

また、広く南アジアを概観すると、ウルドゥー語はインドの22の公用語のうちの1つであり、デリーやラクナウ、ハイダラーバードなど、ムスリムが多い地域を中心に、5千万人を超える母語話者を抱えている。さらに、バングラデシュの宗教学校でも、宗教科目を教える言語として使用されている。このように、ウルドゥー語は南アジアのムスリムの共通語として認識されており、アラビア語やペルシア語と並ぶイスラーム諸言語の一つである [Rahman 2006]。

16) 1988年11月に総選挙が行われ、パキスタン人民党が第一党となり、ベーナズィール・ブットー (Benazīr Bhūttō, 1953–2007、首相在位 1988–90, 93–96) がパキスタン初の女性首相に就任した。12月には、ズィヤー大統領時代の上院議長で、ズィヤーの死去で大統領代行を務めていたイスハーク・ハーン (Ghulām Ishāq Khān, 1915–2006、大統領在位 1988–93) が正式に大統領に就任した。

B.ブットーは民間資本重視を打ち出すなど、従来のパキスタン人民党とは異なる柔軟な対応を見せたが、インド問題など内政上の不安定さに加え、軍の掌握に失敗し、イスハーク大統領とも不和であった。1990年8月、イスハーク大統領は国民議会を解散し、ブットー首相を解任した。

1999年10月、ムシャラフ (Parvez Musharraf, 1943–、大統領在位 2001–08) が無血クーデタにより政権を掌握した。ムシャラフはシャリーフを逮捕させ、非常事態を宣言して憲法を停止し、議会を解散させた。

17) 公用語はウルドゥー語とするが、切り替えへの経過措置として1973年の憲法発布から15年間 (1988年まで) に限り英語の併用を認めるという記述が憲法251条2項にある。ただ、15年過ぎても公用語の切り替えは終わらず、現在に至る [萬宮 2004: 83]。

本節では、ウルドゥー語で書かれた歴史言説をとりあげ、パキスタンにおけるイスラーム認識を明らかにする。

2. パキスタンにおける歴史言説

本稿で分析対象とした一次資料は、主に(1)ウルドゥー語教科書、(2)歴史の教科書、(3)歴史書に分類される。一部の教科書(例えば[Moss 2007])を除いて、いずれも、パキスタン人の筆者によって、ウルドゥー語で書かれている。

まず、(1)では、パキスタン国内の公立学校で、主にパンジャブ人を対象としたウルドゥー語の授業で使われる教科書を採り上げた。特に、パンジャブ教科書委員会(Punjab Text Book Board)が直接監修しているものを分析した[Punjab Text Book Board 2003; 2006; 2008?]。

(2)歴史に関する教科書では、主に公立学校の歴史(tārīkh) [Moss 2007; 2008]、パキスタン学(muṭāla‘a-e Pākistān) [Punjab Text Book Board 2002; Hayat 2007; Rabbani 2008]と、社会科(mu‘āsharātī ‘ulūm)の教科書[Sheikh Shaukat Ali & Sons n/a.a; n/a.b]を扱った。パキスタン学は、日本の学校教育の日本史と社会科を混合した教科であり、歴史、社会科のそれぞれの教科書と重複する内容も多い。なお、[Hayat 2007; Rabbani 2008]は、公務員試験対策用の教科書であり、主に大学の学生を対象としている。

(3)教科書以外の歴史書では、季刊誌『歴史(Tārīkh)』の編集者で、ムガル朝史の権威でもあるDr. Mubarak Aliら、パキスタン人自身によって書かれた歴史書[Mubarak 1994; Aslam 2008; Ciragh 1993; Hashmi Faridabadi 1987]、パキスタンのアイデンティティに関する文書[Ciragh 1985; Javed 1983; Zaidi 1993]などを対象とした。

これらの資料は、従来ほとんど分析されてこなかったが、パキスタン人の歴史認識形成を知る上で重要な手掛かりとなる。

(1) ウルドゥー語教科書の事例

パキスタンでは州ごとに教科書委員会が設置され、教科書のシラバスを作成している。内容に関しては、州ごとにそれほど大きな差はない。教科書委員会の他にも、ニューキタービスターン・パブリッシングやオックスフォード大学出版カラーチャーなど、地元の出版社が教科書委員会のシラバスにのっとって教科書を作成している。教育の現場では、学校ごとにどの教科書を採用するかが決められている。

ウルドゥー語の教科書に限らず、パキスタンの公立学校の教科書では、表紙の内側か裏表紙に国歌(Qaumī Tarānah)¹⁸⁾とジンナーの演説文¹⁹⁾、彼の肖像画が載せられている[Punjab Text Book Board 2002; 2003; 2006a; 2006b; 2008?a; 2008?b; 2008?c; Sheikh Shaukat Ali & Sons n/a.a; n/a.b]。演説文は1947年9月26日の講演会のもので、パキスタンにおける教育の重要性を説いたものである。演説はもともと英語でなされており、英語で書かれた教科書では原文のまま、ウルドゥー語で書か

18) Qaumī Tarānah: Pāk sarzamīn shād bād/ Kishwar-e-ḥasīn shād bād/ Tū nishān-e-‘azm-e-‘ālīshān/ Arz-e-Pākistān!/ Markaz-e-yaqīn shād bād/ Pāk sarzamīn kā nīzām/ Qūwat-e-ukhūwat-e-‘awām/ Qaum, mulk, sulṭanat/ Pā’indah tābindah bād!/ Shād bād manzil-e-murād/ Parcham-e-sitārah-o-hilāl/ Rahbar-e-taraqqī-o-kamāl/ Tarjumān-e-māzī/ shān-e-hāl/ Jān-e-istiqbāl!/ Sāyah-e-Khudā-e-Zū-l-Jalāl. なお、タイトルである Qaumī Tarānah は「国の歌」を意味している。歌詞のみが掲載されており、楽譜、作詞家、作曲家や制定年度などの記述はない [Punjab Text Book Board 2008?a]。

19) 原 文: “Education is a matter of life and death for Pakistan. The world is progressing so rapidly that without requisite advance in education, not only shall we be left behind others but may be wiped out altogether.” (September 26, 1947, Karachi) Quaid-e Azam Muhammad Ali Jinnah, Founder of Pakistan [Punjab Text Book Board 2002].

れた教科書では、ウルドゥー語に翻訳されている。国歌は英語で書かれた教科書でも、ウルドゥー語で載せられている。

パンジャブ教科書委員会が直接監修・出版しているウルドゥー語の教科書として、[Punjab Text Book Board 2003; 2006a; 2006b; 2008?a; 2008?b; 2008?c] が挙げられる。教科書のタイトルは、低学年（第1～5学年）用である『私たちの本 (*Merī Kitāb*)』と高学年（第6学年～）用の『ウルドゥー語 (*Urdū*)』の二種類がある。扉表紙の裏側には、複数の執筆者や編集委員の名前が列挙されており、発行部数も確認できる²⁰⁾。

次に、第一学年のウルドゥー語の教科書の内容を概観する。

『私たちの本 (*Merī Kitāb*)』第1学年用

- 第1課 神への賛美（詩）(Hamd (naẓm))
- 第2課 親愛なる預言者ムハンマド (Piyāre Nabī)
- 第3課 アッラーの最後の書（聖典クルアーン）(Allāh kī Ākhīrī Kitāb)
- 第4課 アラビア文字 (‘Arabī Hurūf)²¹⁾
- 第5課 礼拝 (Namāz)
- 第6課 わたしたちはひとつです (Ham Ek hain)
- 第7課 会話のあいさつ (Bāt cīt ke Ādāb)
- 第8課 正直者（詩）(Sac kaho (naẓm))
- 第9課 すばらしい！ (Shābāsh)
- 第10課 保護 (Hifāzat)
- 第11課 黒い雲がやってくる (Kāle Bādal ā’ēn ge)
- 第12課 健康と清潔 (Siḥḥat aur Safā’ī)
- 第13課 ある旅 (Ek Safar)
- 第14課 アッラーの恩恵 (Allāh kī Ni‘maten)
- 第15課 動物と木 (Jānwar aur Paude)
- 第16課 わたしたちの家 (Piyārā Ghar)
- 第17課 わたしたちの学校 (Hamārā Iskūl)
- 第18課 わたしたちの国（詩）(Hamārā Desh (naẓm))

[Punjab Text Book Board 2008?a]

まず、イスラームに関するトピックの多さが目に付く。どの学年でも、第1課は神を賛美する詩が取り上げられており、第2課では預言者ムハンマドを讃える文章である [Punjab Text Book Board 2003; 2006a; 2006b; 2008?a; 2008?b; 2008?c]。この他にも、ナマーズ（礼拝）の方法や、ムスリムとして正しく生きることなどをテーマとした文章が多く、挿絵もカアバ神殿やモスクの様子などが描かれている。このため、一見するとイスラーム学の教科書にも見える。

また、愛国的な文章が多いことも特徴として挙げられる。第6課「わたしたちはひとつです」では、パキスタンに4つの民族が共存していることを言及した上で、パキスタンはイスラームを紐帯

20) 例えば、ウルドゥー語第1学年用の教科書は初版で、増刷が7回されており、印刷発行部数は26,000部、金額は23パキスタンルピーである [Punjab Text Book Board 2008?a]。また、第6学年は改定第2版で、増刷が11回、印刷発行部数が26,250部で、一冊50パキスタンルピーである [Punjab Text Book Board 2003]。

21) ここでは、ウルドゥー語としてのアラビア文字ではなく、アラビア語のアルファベットの説明がされている。そのため、この課ではウルドゥー語を通常書き表すナスターリーク体 (Nasta‘līq) ではなく、ナスフ体 (Naskhī) が使われている [Punjab Text Book Board 2008?: 6]。

とするひとつの国であることを強調している [Punjab Text Book Board 2008?a: 9]²²⁾。第18課の「わたしたちの国」という詩では、パキスタンへの忠誠と愛国心が、平易な言葉で歌われている [Punjab Text Book Board 2008?a: 40]。

このように、パキスタンのウルドゥー語の教科書は、単なる言語能力向上にとどまらず、イスラームの知識を与え、パキスタンへの愛国心を高めるよう意図されていると思われる。

(2) 歴史教科書の事例

まず、歴史 (tārīkh)、パキスタン学 (muḡāla'a-e Pākistān)、社会科 (mu'āsharatī 'ulūm) の教科書の内容を概観する。

『オックスフォード パキスタンの歴史2 (Oxford History for Pakistan Book 2)』第7学年用

世界

- 第1課 ブッダの生涯と教え
- 第2課 インドにおける仏教の盛衰
- 第3課 アジアへの仏教の普及
- 第4課 キリスト教の始まりと普及
- 第5課 中世における教会と教皇の権力
- 第6課 人々の生活の中の教会
- 第7課 中世——封建制度
- 第8課 貴族の生活と家
- 第9課 中世のイギリスの街
- 第10課 イスラームのはじまり
- 第11課 イスラームの教え
- 第12課 イスラーム文明——1. 科学と医学
- 第13課 イスラーム文明——2. 芸術と建築
- 第14課 十字軍初期
- 第15課 十字軍後期
- 第16課 十字軍の影響
- 第17課 大航海時代：東方へ
- 第18課 大航海時代：西方へ
- 第19課 大航海時代の影響：東
- 第20課 大航海時代の影響：西
- 第21課 アメリカのスペイン植民地
- 第22課 ルネッサンス
- 第23課 ルネッサンス建築
- 第24課 ルネッサンス芸術
- 第25課 ルネッサンスの科学と技術
- 第26課 ルネッサンス的教養人：レオナルド・ダ・ヴィンチ

22) この課の冒頭では、預言者ムハンマドの言葉から「すべてのムスリムが兄弟である」と引用されている。また、ukhūwat (兄弟愛、友愛) という単語が使われている [Punjab Text Book Board 2008?a: 9]。

- 第 27 課 宗教改革とその原因
- 第 28 課 ルターとプロテスタント教会
- 第 29 課 日本
- 第 30 課 ヨーロッパの国民国家の勃興
- 第 31 課 中国
- 第 32 課 世界史のまとめ

パキスタン

- 第 33 課 ガズナ朝のマフムード
- 第 34 課 ゴール朝と奴隷王朝
- 第 35 課 デリー・スルタン朝の興亡
- 第 36 課 モンゴル軍：チンギスとティムール
- 第 37 課 ラージプート
- 第 38 課 ムガル朝初期
- 第 39 課 アクバル皇帝の業績
- 第 40 課 アクバルの改革
- 第 41 課 ジャハーンギールとシャー・ジャハーン
- 第 42 課 アウラングゼーブの業績
- 第 43 課 アウラングゼーブの偉業
- 第 44 課 ムガル皇帝の終焉
- 第 45 課 ムガル朝時代の社会生活
- 第 46 課 ムガル朝の美術と建築
- 第 47 課 中央インドと南インド
- 第 48 課 インドのヨーロッパ到来
- 第 49 課 フランスとイギリスのインドをめぐる闘い
- 第 50 課 パキスタンとインド亜大陸のまとめ

[Moss 2008]

『パキスタン学 (Mu'āla 'a-e Pākistān)』 公務員試験用

- 第 1 章 インド亜大陸におけるムスリム社会の発展と成長 (Barr-e Saghīr men Muslim mu'āsharah kā Irtiqā-o Nashv-o Numā)
- 第 2 章 パキスタン論 (Nazariyah-e Pākistān)
- 第 3 章 パキスタンの歴史背景 (Nazariyah-e Pākistān kā Tārīkhī Pas Manẓar)
- 第 4 章 政治闘争とパキスタン建国運動 (Siyāsī Jidd-o Jahd aur Tahrik-e Pākistān)
- 第 5 章 パキスタン建国 (Qayām-e Pākistān)
- 第 6 章 パキスタンの地理 (Pākistān kā Jughrāfiyah)
- 第 7 章 パキスタン外交政策 (Pākistān ki Khārījah Pālisī)

[Hayat 2007]

『標準 社会科 (Mi'yārī Mu'āsharatī 'Ulūm)』 第 1 学年用

歴史 (Tārīkh)

第1課 預言者ムハンマド (Ān-ḥaḡrat)

第2課 アッラーマ・イクバル (Allāmah Iqbāl)

第3課 偉大なる指導者 (ムハンマド・アリー・ジンナー) (Qā'id-e A'ẓam)

第4課 リヤーカト・アリー・ハーン (Liyāqat 'Alī Khān)

市民生活 (Shuhrat)

第5課 道路の歩き方 (Sarak par calne ke Uṣūl)

第6課 病院 (Haspaṭāl)

第7課 モスク (Masjid)

第8課 清潔なからだ (Jismānī Ṣafā'ī)

第9課 郵便配達人 (Dākiyā)

地理 (Jughrāfiyah)

第10課 季節 (Mausim)

第11課 方角 (Samten)

第12課 パキスタン (Pākistān)

第13課 国旗 (Qaumī Parcam)

第14課 産業 (Paidāvār)²³⁾

[Sheikh Shaukat Ali & Sons n/a.a.]

パキスタンの歴史書の第一の特徴として、イスラームから始まる歴史観が挙げられる。パキスタンの公立学校で使われている歴史の教科書には、インダスもガンダーラもハラッパー遺跡への言及もない。歴史の始まりにはシンドへのイスラームの到来があり、すぐにガズナ朝やイスラーム諸王朝の記述が続く [Moss 2008] [Punjab Text Book Board 2002]。

例えば、[Hayat 2007] では、1 ページ目にアッラーの創った世界について、クルアーンを引用して解説され、2 ページ目では預言者ムハンマドについて書かれている。2 ページ目の中段にアッバース朝の簡単な説明があり、すぐにシンド征服とカースィムにつながっていく [Hayat 2007:1-3]。シンド征服以前の、インダス文明や、ガンダーラ、ヒンドゥー王朝などの記述は見当たらない。

また、南アジアのイスラーム化については、スーフィーやウラマーの果たした役割が高く評価されている。[Punjab Text Book Board 2002] では、特に代表的なスーフィーらとして、ダーター・ガンジ・バクシュ (Hazrat Ali Hijvari/Hazrat Data Gunj Buksh)、シャイフ・イスマイル・ラホーリー (Sheikh Ismail Lahori)、ラール・シャーバズ・カランドル (Lal Shahbaz Qalendir) など著名な聖者があげられている [Punjab Text Book Board 2002: 5] (表記はすべて原文通り)。

全体を見ると、ムガル朝に割かれるページ数が、突出して多いことも特徴として挙げられる。その他にも、世界の宗教としてキリスト教や仏教を紹介しているのに、ヒンドゥー教を取り上げていないものもある [Moss 2008]。これは、国内のヒンドゥー教徒の存在や、隣国の影響、歴史的背景などを考慮すると、明らかに不自然である。

さらに、ジンナーやイクバル、リヤーカト、ジンナーの妹ファーティマなど、パキスタンの建国の偉人に関する文章も多い [Sheikh Shaukat Ali & Sons n/a.a; n/a.b]。[Punjab Text Book Board 2002] では、シャー・ワリーウッラーやサイイド・アフマド・バレールヴィー、サイイド・アフマド・

23) 産業には農業と工業の二種類があると書かれている。サービス業に関する記述はない [Sheikh Shaukat Ali & Sons n/a.a.]。

ハーンらが、思想的に重要な役割を果たしたと述べられており、第2章「パキスタンの建国」の中に、その記述が含まれている [Punjab Text Book Board 2002: 15–17]。同様の記述は [Rabbani 2008] にも見られる。

(3) 歴史書の事例

歴史教科書と同じように、一般向けの歴史書でも、パキスタンの起源は8世紀や10世紀にさかのぼる。[Zaidi 1993] では、最初の人アダムから第1話が始まる。第2話で預言者ムハンマド、第3話から第5話まで預言者時代の話が続き、第6話からはアッバース朝やセルジューク朝の話題になる。最終話である第11話では、南アジアに言及される。この第11話ではまず、スインドへのイスラームの到来と、南アジアでのイスラーム諸王朝の展開が述べられ、ムガル朝とイギリスに対する独立闘争に発展し、最終節でパキスタンの建国にいたる。途中でヨーロッパや中国などの記述はなく、アラビア半島から始まった話が、まっすぐパキスタンの地まで続いている。

南アジアにイスラームが到来した時代の状況について、ザイディは「当時、この地（スインド）でヒンドゥー王ダーヒル（Dāhir）が政権を握っており、民衆を抑圧していた。ムハンマド・イブン・カーシム（Muḥammad ibn al-Qāsim）は、民衆を救うため、時のカリフから許可を受け、この地に攻め入った」と記している [Zaidi 1993: 173–175]。この記述からも、イスラームとともにやってくる「善き救世主」としてのカーシム像や、イスラーム軍による征服を好意的に受け止める視点が伺える。

また、ハーシュミーは著書『パキスタンとインドのムスリムの歴史』の冒頭部分で、「イスラームが伝来する以前、インドの地にはいかなる歴史も存在しなかった」と述べている [Hashmi 1987: 1]。同じく、第1章では「カーシムの到来によってパキスタンの礎石が築かれた」と明記し、8世紀にパキスタンの起源を求めている [Hashmi 1987: 77]。

さらに、チラグはジンナーの「パキスタンという地は、南アジアに最初にイスラームがやってきたときに、すでにその建国が予定されていた」という演説を引用している [Ciragh 1985: 9]。

3. パキスタンにおけるイスラーム認識

パキスタンの歴史言説を分析した結果、パキスタン人が自分たちのイスラームを考える際の、以下4つのイスラーム認識が浮かび上がってきた。

- (i) アラビア半島から続くムスリムとしての自覚
- (ii) ムガル朝の継承者としての誇り
- (iii) 19世紀から続くイスラーム復興思想
- (iv) それらに基づく1947年以降のパキスタン人アイデンティティ

南アジアのムスリムの言説には、しばしば、ムガルから継承される南アジアの統治者として文化を担ってきたという自負がうかがえる。つまり、数の上ではヒンドゥー教徒に対してマイノリティであるが、ガズナ朝以来、ムスリムは長く南アジアの統治者であった点に着目するのである。

パキスタン人のアイデンティティには、ムガル朝の継承者としての自負に加え、ヒンドゥー教徒へ対抗意識があることを考慮に入れる必要がある。そこにはウルドゥー語の問題も加わる。そもそも、南アジアにおける二大主要言語であるウルドゥー語とヒンディー語は、ヒンドゥスターニー語

というひとつの無文字言語から発展したものであった。言語学的には、10世紀頃に、ウルドゥー語がアラビア文字、ヒンディー語がデーヴァナーガリー文字で書き表されるようになり、分岐したと考えられている。

しかし、両言語の差異を、文字や語彙の区別だけで説明するのは不十分である。この10世紀の間に、両言語は文化的、社会的に異なる経緯をたどってきた。特に、19世紀以降、政治的、社会的状況の中で、二つの独立した言語に分離していったことが両言語を大きく隔てることになった[藤井2002]。ムスリムはアラビア語やペルシア語を借用するようになり、ヒンドゥー教徒はサンスクリット語起源の単語を積極的にヒンディー語に取り入れた²⁴⁾。現在では、ウルドゥー語はムスリムの言語であり、ヒンドゥー教徒の言語はヒンディー語であると認識されている。この言説がいつ、どのように生まれたのか、実際どの程度共通認識として定着しているのか、さらなる分析が必要である。

参考文献

- 新井信之(解説・訳)2007「パキスタン・イスラム共和国」萩野芳夫・畑博行・畑中和夫(編)『アジア憲法集』明石書店, pp.613-664.
- 井上あえか2003「パキスタン政治におけるイスラーム」『アジア政治』49(1), pp.5-18.
- 井上あえか・子島進2004「パキスタン統合との原理としてのイスラーム」黒崎卓・子島進・山根聡(編)『現代パキスタン分析』岩波書店, pp.27-48.
- 加賀谷寛1961「パキスタン国家形成におけるイスラムの役割」『東洋文化』29, pp.71-98.
- 1991「パキスタンの政治と宗教」佐藤宏(編)『南アジア 政治・社会』アジア経済研究所, pp.209-229.
- 1992「政治エリートとしての宗教勢力」山中一郎(編)『パキスタンにおける政治と権力: 統治エリートについての考察』アジア経済研究所, pp.255-294.
- 加賀谷寛・浜口恒夫1977『パキスタン・バングラデシュ』山川出版社.
- 小杉泰2006『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会.
- 近藤治2003『ムガル朝インド史の研究』京都大学学術出版会.
- 佐藤正哲・中里成章・水島司1998『ムガル帝国から英領インドへ』中央公論社.
- 深町宏樹1992「パキスタンにおける政治と軍」山中一郎(編)『パキスタンにおける政治と権力: 統治エリートについての考察』アジア経済研究所, pp.157-180.
- 藤井毅2003「近現代インドの言語社会史」小谷汪之(編)『現代南アジア5 社会・文化・ジェンダー』東京大学出版会, pp.63-98.
- 松村耕光2003「多言語社会をつなぐ」広瀬崇子・山根聡・小田尚也(編著)『パキスタンを知るための60章』明石書店, pp.106-111.
- 萬宮健策2004「地域語のエネルギーに見る国民統合と地域・民族運動」黒崎卓・子島進・山根聡(編)『現代パキスタン分析』岩波書店, pp.83-119.
- 湯浅道男1997「パキスタンとバングラデシュ」千葉正士(編)『アジアにおけるイスラーム法の移

24) 独立運動の過程で、全インド・ムスリム連盟は「ウルドゥー語はインド・ムスリムの言語である」と明言した[松村2003: 109]。

- 植——湯浅道男教授還暦記念』成文堂, pp.208–223.
- 山中一郎 1992 「パキスタンの主要政治エリート」 山中一郎（編）『パキスタンにおける政治と権力：統治エリートについての考察』アジア経済研究所, pp.3–106.
- 山根聡 2003 「南アジア・イスラームの地平」 小松久男・小杉泰（編）『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会, pp.85–116.
- Akhtar, Saleem. 1998. *Urdū Zabān Kyā Hai*. Lahore: Sang-e-Meel.
- Aasiq, Husain. 2008. *Qur'ānī Urdū*. Jhelum: Book Corner.
- Aslam, Shaikh Navid. 2008. *Pākistān ke Asar-e Qadīmah*. Lahore: Book Home.
- Aziz, Khursheed Kamal. 1987. *A History of the Idea of Pakistan*. Lahore: Vanguard.
- . 2007. *Party Politics in Pakistan, 1947–1958*. Lahore: Sang-e-Meel Publications.
- Butt, M. Rafiq ed. 2001. *The Constitution of the Islamic Republic of Pakistan, 1973*. 2nd ed. Lahore: Mansoor Book House.
- Ciragh, Muhammad Ali. 1985. *Qarārdād-e Pākistān*. Lahore: Sang-e Mīl Publīkeshanz.
- . 1993. *Pākistān: Tārīkh, Jamhūriyyat, siyāsāt, ain, 1947–1990*. Lahore: Sang-e Mīl Publīkeshanz.
- Clark, Grace. 1986. “Pakistan’s Zakat and ‘Ushr as a Welfare System,” Weiss, Anita M. ed. *Islamic Reassertion in Pakistan: the Application of Islamic laws in a Modern State*. Syracuse, N.Y.: Syracuse University Press, pp.79–95.
- Government of Pakistan. 1989. *Quaid-i-Azam Mohammad Ali Jinnah: Speeches and Statements as Governor General of Pakistan, 1947–48*. Government of Pakistan Ministry of Information and Broadcasting Directorate of Film and Publications.
- Hashmi Faridabadi, Sayyid. 1987. *Tārīkh-e Musalmānan-e Pākistān o Bhārat (Hind)*. Karaci: Anjuman-e Taraqqī-e Urdū Pākistān.
- Hayat, Mehr Muhammad. 2007. *Muqāla‘a-e Pākistān*. Lahore: ‘Ilmī Kitāb Khānah.
- Iqbal, Muhammad. 1934. *The Reconstruction of Religious Thought in Islam*. London: Oxford University Press.
- Jalal, Ayesha. 1985. *The Sole Spokesman: Jinnah, the Muslim League and the Demand for Pakistan*, (Cambridge South Asian Studies). Cambridge: Cambridge University Press.
- Javed, Qazi. 1983. *Hindū Muslim Tahzīb*. Lahore: Vaingard Buks.
- Kashmiri, Tabasam. 2003. *Urdū Adab kī Tārīkh*. Lahore: Sang-e-Meel.
- Khan, Yasmin. 2008. *The Great Partition: the Making of India and Pakistan*. London: Yale Univ Press.
- Mai, Mukhtar and Cuny, Marie-Therese. 2006. *In the Name of Honour: a Memoir*. London: Virago Press.
- Misra, B.B. 1961. *The Indian Middle Class: Their Growth in Modern Times*. London: Oxford University Press.
- Moss, Peter. 2007. *Oxford History for Pakistan Book 3*. Karachi: Oxford University Press.
- . 2008. *Oxford History for Pakistan Book 2*. Karachi: Oxford University Press.
- Mubarak, Ali. 1994. *Ākhīrī ‘Ahad-e Mughaliyah kā Hindustān*. Lahore: Fikshan Hā’ūs.
- Punjab Text Book Board. 2002. *Pakistan Studies 9–10*. Lahore: Sofi Sons.
- . 2003. *Urdū 6*. Lahore: Sheikh Muhammad Hassin and Sons.
- . 2006?a. *Merī Kitāb 4*. Lahore: New Kitabistan Publishing Company.

- . 2006?b. *Merī Kitāb* 5. Lahore: Maktabah-e Mū‘īn al-Adab.
- . 2008?a. *Merī Kitāb* 1. Lahore: Kutub Khana Khurdshida.
- . 2008?b. *Merī Kitāb* 2. Lahore: Khalid Buk Depo.
- . 2008?c. *Merī Kitāb* 3. Lahore: Kutub Khana Khurdshida.
- Rabbani, Muhammad Ikram. 2008. *Pākistān Afe’arz*. Lahore: The Caravan Book House.
- Rahman, Tariq. 2006. “Urdu as an Islamic Language,” *Annual of Urdu Studies* (21), pp.101–119.
- Schimmel, Annemarie. 1980. *Islam in the Indian Subcontinent*. Lahore: Sang-e-Meel Publications.
- . 1989. *Islamic Names*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Sheikh Shaukat Ali & Sons. n/a.a. *Mi’yārī Mu’āsharatī ‘Ulūm* 1. Karachi: Sheikh Shaukat Ali & Sons.
- . n/a.b. *Mi’yārī Mu’āsharatī ‘Ulūm* 2. Karachi: Sheikh Shaukat Ali & Sons.
- Talbot, Ian. 1998. *Pakistan: A Modern History*. London: C. Hurst.
- Urdu Science Board. 1988. *Gharelū Insā’iklopiḍiyā*. Lahore: Urdu Science Board.
- Verma, Anand K. 2001. *Reassessing Pakistan: Role of Two-Nation Theory*. New Delhi: Lancer Pub. & Distributors.
- Zaidi, Sayyid nazar. 1993. *‘Aẓīm Qaum kī kahānī*. Lahore: Ferozsons.